

3日目 オフィチエンシム アウシュビッツ第2収容所 ビルケナウー1

おだやかな「墓地」

そして2日目。

思い返せば、前日はあまりにも重い一日でした。

第1収容所の大量の展示、
スモーレン元館長の涙ながらの体験談、
ドイツとの複雑な関係を体現したような交流センター、
公式ガイドの中谷さんとの出会い、立花先生との対談

最後の中谷さんのお話が、
それまで見てきたものに対する混乱をほぐしてくれるのに
とても助けになっている気がします。

消化不良になった胃に、日本人にあう消化剤をいれられて、
体に吸収させる手助けをしてくれたような感じです。

けれども、まだまだ前日に得たすっきりしない思いは残っています。
参加者はそれぞれに憂鬱な思いを抱えたままです。

そんな状態で、第2収容所ビルケナウへ。





私はここに10年前に来ました。

その時は、クラカウから友人とタクシーをチャーターし、2つの収容所跡を1日で回りました。

しかし私にとって、アウシュビッツに行くとは、「第1収容所に行く」だったのです。要は勉強不足でした。第2収容所のビルケナウは存在すら知らず、まったく認識外でした。

しかし、タクシーの運転手は、そんな私たちをビルケナウに連れて行きました。

第1収容所の見学がおわって、帰ろうとする私たちに、
もうひとつある、と。

アウシュビッツに来るからにはここに来るのが当然だ、という口調で。

ビルケナウに到着した私は、門の向こうに広がる光景に呆然としました。

収容者が詰め込まれたバラックは、手前の1列だけが残されています。

その後ろにはバラックと平行に、煙突と柱のあとだけが続きます。

その光景が、まるで地平線の果てまでバラックが延々とあったかのような錯覚を起こさせます。

いえ、錯覚ではなく、実際に見渡す限り、バラックがあったのかもしれませんが。

要するに、私の想像の限界を超えていたのです。

それだけ多くの人たちが、馬小屋を改築しただけ粗末なバラックに押し込まれていた。

その光景を思い浮かべることができなかった。

だからよけい大きな衝撃を受けてしまったのかもしれませんが。



そのときは、門からつづく線路の端まで歩きました。そこには記念碑があります。

しかし、私はそこからまた線路を引き返しました。

先に進む気力がもたなかったのです。

帰国後、本を読んで、線路の奥の林には、まだガス室や施設の跡があることを知りました。

しかし、「もうあんな思いは一回で十分。見そびれたのは残念だが、二度と行くことはないだろう」と、周囲に漏らしました。

そのことを覚えていた母は、私がまたアウシュビッツに行く、今度は立花先生と一緒に、と行ったとき、相当驚きました。母の兄である伯父が愛読していた文藝春秋の常連・立花隆と娘が行動をともにするだけでなく、あれほど嫌がっていた場所にまた行くのか、一体なにが起こったのだ、と。

それほどまでに、私は一回目に行ったときに大きなショックを受けていたのです。

そのビルケナウに 10 年ぶりに立った私は、少し複雑な思いを抱いていました。

はたして、また前回のような衝撃を受けるのだろうか、

線路の先までいけるのだろうか。

けれども、今回は好奇心旺盛な立花先生と一緒に。奥まで回らないわけにはいかない。同じような衝撃を受けても、覚悟して、奥に進まなければならないのだ。そう言い聞かせていました。

そして10年ぶりにビルケナウの門をくぐったのです。



そこは10年前とまったくかわらず、ただただ広々としていました。

真ん中にあるのは、線路のみです。

端に、当時多くのユダヤ人が詰め込まれて運ばれた貨物車があります。

けれども、10年前にきたときより、緑が多く晴れていたかもしれません。

私の思い出のなかのアウシュビッツはどんよりとした曇り空でした。

今回はみんなといて、気が落ち着いているからでしょうか



入り口にある旧監視塔の見学とそこから見える線路跡



当時をしのぶ貨車

けれども、こんなおだやかな場所で、ベルトコンベアーにのったかのように、「系統的」に、流れ作業のごとく多くのユダヤ人が欧州各国から到着し、「選別」され、ガス室へと送られたのです。



■その日の立花先生

この日、一番奥まで歩いた時点で、立花先生の万歩計は 12000 歩でした。

収容所と宿泊施設までの移動はすべてバスだったにも関わらず。

それほどビルケナウは広大だったのです。

ちなみにその歩数は、確かベルリンを一日歩いたときに記録したのと同じだった気がします。